

Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU Autumn/Winter 2022



Sharing Experiences

Contents —目次—

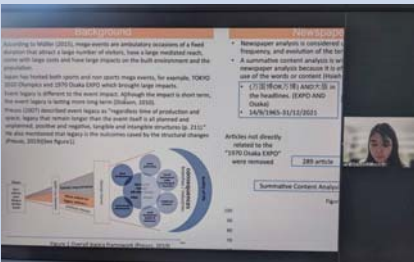
1. Reports —和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告—
2. Topics —過去のイベントとニュース—
3. Future Events —今後のイベント紹介—

■ 観光学部でのこれまでの歩み

望月 なぎささん (13期生 / 山梨県立甲府西高等学校出身)



私が進学の際に和歌山大学を選択した理由は、単に「旅行が好き」という理由からでした。特に海外への憧れが強く、大学在学中に絶対に留学に行きたいと考えていました。1年次は交換留学に必須である英語テストのスコアを取得するために勉強しましたが、高校受験までの英語は文法や長文読解がメインで行われていたため、ライティングやスピーキングを含む4技能のテストは難易度が高く、自らの英語力の低さに涙したことを今でも覚えています。自分1人ではスコア獲得は難しいと考え、Global Programの授業を積極的に取ったり、苦手なライティングとスピーキングをネイティブの先生方に個別指導したりしていただきました。しかし、英語力が上がり始めたとき実感した直後に新型コロナウイルスの感染が拡大しました。留学はもちろん、学校にも行けない中でしたが、GP科目を取り続け、最低限の英語力は維持するように心がけていました。



3年次になりゼミが始まった時、今までの英語学習が、留学のためだけではなく、これまでできなかった研究を把握する上で、英語で書かれた文献を読む必要がありました。また、「AY 2021 Joint Student Symposium on Tourism, Hospitality and Leisure Research」、「SEAMA2022: Islands Tourism & Hospitality Management」や「2022年度観光学術学会」などの学会でも英語で発表する機会があり、観光について学び、それをより多くの人に伝える時に、英語は非常に役に立ちました。そして3年間の積み重ねがあり、2022年7月2日(土)・3日(日)に開催された観光学術学会第11回大会で、英語で執筆している卒業論文の研究内容の一部を英語で発表した結果、「優秀賞」を受賞することができました。



観光を学ぶということは現地に行き、実践的なことをすることだけではありません。文献を読み、自分の研究を書き、そして発表することも大学で学ぶ観光です。就活生の多くが学生時代に力を入れたこととして部活、インターン、大学のプロジェクトを挙げますが私は間違いなく研究活動に力を入れたと答えます。和歌山大学の国際的かつ、最先端の観光学を学び研究できる環境で培った論理的思考力、主体的行動力、プレゼンテーション能力などは社会に出ても必ず役に立つと信じています。

入学当初の私であれば論文を読み切ること、英語で研究成果を発表することも不可能に近かったのではないかと思います。3年半でここまで成長できたのは、Global Programの学生一人ひとりに対しての手厚いサポートや観光学部の先生方の的確なご指導のおかげです。9月から入学前からの目標である交換留学で、イギリスに一年間滞在しますが、これがゴールではなく、その先の選択肢を広げる第一歩だと思って頑張ります。

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022082500092/>

■ 第13回関空発「学生と旅行会社でつくる」海外旅行」優秀賞

井上 菜緒さん (15期生 / 広島県立広島皆実高等学校出身)



2022年6月25日(土)、同じ2回生の井口実南、長尾朋実、村崎あかりと共に、関西国際空港で行われたとある企画の最終審査会に参加してきました。この企画とは、近畿圏の学生を対象に「学生と旅行会社でつくる」海外旅行のプランを募集するものです。私たちは、観光学部佐野先生からのサポート、そして一次審査以降は株式会社南海国際旅行の皆さんからもアドバイスをいただきながら、約半年で一つの旅行プランを作り上げました。

自分自身のための旅行プランではなく、ターゲットとテーマを定めて組み立てていくことは、どのメンバーにとってもほとんど初めての体験でした。定めたターゲットのニーズに私たちのプランが対応できることも示す必要があり、様々なデータを調べ活用していきました。私たちのプランは「甘党男子、ソロ活をするinパリ〜人生の糖分補給〜」というタイトルのもと、20代から30代のスイーツ好きな男性をターゲットとしました。パリという既に有名な観光地を舞台に、他とは違うユニークなプランに仕上げることができたと感じています。佐野先生には、最も重要と言えるテーマと、プレゼンの相手に興味を持てるような構成についてたくさんのアドバイスをいただきました。そのおかげで、30組以上が挑んだ一次審査を潜り抜けた7組のうちに入ることができました。最終審査に向け

では、それぞれのグループに担当会社がつき、協力して企画を更に良いものへと近づけていきます。株式会社南海国際旅行の皆さんとは、計3回のミーティングを行いました。旅行会社の方からの専門的な視点が入ることで、自分たちでは気が付かなかった改善点が見えてきました。客として旅行会社の人と話すことはあっても、ともに商品企画を作り上げる機会はそうそうありません。学生のうちにこのような経験ができたことも、今回の挑戦で得られたもののうちの一つです。そしてついに臨んだ最終審査会でも、観光に精通した審査員の方々に前にしてプレゼンテーションを行ったこと、他県の学生と交流できたことなど、最後まで貴重な体験の連続でした。

様々な方の支えを受けながら、今回私たちは優秀賞をいただくことができました。この挑戦へのきっかけをくださった佐野先生、最終審査会当日にまで足を運んでくださった株式会社南海国際旅行さん、プレゼンにアドバイスをくださった観光実践教育サポートオフィスの金岡先生には、メンバー一同感謝の気持ちでいっぱいです。最優秀賞には届きませんでしたが、得られたものは大きく、これからの学生生活やその後の将来にも生かすことができると確信しています。観光学部生として新たに成長をさせてくれた、そんな素晴らしい経験になりました。

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022062900027/>



■ 中之島コープの駐車場の空きスペースを花壇へ

山口 奈々さん (13期生/和歌山県立海南高等学校出身)

わかやま市民生協さんのインターンシップで考案した私の企画を、実現して頂くことになりました。就職活動の一環として、何かをゼロから作り上げたことがなかったため、ちょっとしたチャレンジ精神で応募しました。内容は、生協さんの店舗・コープ中之島店さんで、駐車場の空きスペースに花を植えて花壇にするというものです。自分が少しでも詳しいことを取り上げた方が考えやすいと思い、自身の卒業研究のテーマである「花」に関連付けました。

企画の実現のため、考えることはたくさんありました。まず、実現可能性の点から、当初インターンシップで提案したものを大幅に変更し、花壇を作る企画にしました。テーマである花を用いることと企画の目的だけ変えずに、内容や場所、規模や期間、持続可能性、どんな方にどんな風に協力して頂くか、などを考え直しました。

その間、一番大変だったことは「一人で考えようとした」ことでした。完璧主義な性格から、自分が考えた企画は自分で最後までやり遂げなければ、という変な思い込みを持ってしまいました。その結果、アイデアが一人分しか出ないので企画が行き詰り、次第にモチベーションも下がってしまいました。

一人で考えることの限界に気づいた私は、思い切って自分が所属する加藤久美ゼミナールの皆さんにご協力をお願いしました。ゼミのメンバーは私が花について研究していることを知っているし、何より日頃から様々な事を議論しているため、新しい発想や説得力のある意見がもらえるのではないかと考えたからです。ゼミのお時間をもらって現状を見せ、加藤先生とメンバーから様々なアイデアを頂きました。そのおかげで、ようやく企画の輪郭が見えてきました。それからは企画を完璧にすることよりも、参加者への影響など実施後のことを意識して、考えを練っていきました。

その後生協の方や地域の理事さんに企画を見て頂き、今年の春、3つの花壇のうち1つにマリーゴールドを植えました。植え付け中には、お店を訪れる方に「きれいだね」と声をかけて頂き、すごく嬉しい気持ちになりました。

現在は、月に一度、地域の方や生協の職員の方が集まり花壇のお手入れを行っています。秋冬に向けて、10月にプリンスチューリップとカラフルムスカリの植え付けを予定しています。他の空きスペースにも取り掛かれるよう、さらにボランティアを募っていこうと考えています。

最後にはなりますが、私の拙い企画を素敵な活動に実現して頂いたわかやま市民生協の皆さん、頼もしい意見と温かい言葉をかけてくれた加藤ゼミの皆さん、本当にありがとうございました。



■ ゼミ活動報告 熊野三山を巡る旅行

石田 理沙さん (14 期生 / 大阪府立泉陽高等学校出身)
笠原 沙貴さん (14 期生 / 福岡県立宗像高等学校出身)
根来 愛実さん (14 期生 / 大阪府立岸和田高等学校出身)
野田 優さん (14 期生 / 大阪府立泉北高等学校出身)
眞島 沙奈さん (14 期生 / 兵庫県立尼崎稲園高等学校出身)
松澤 拓未さん (14 期生 / 愛知県立豊橋東高等学校出身)
和田 陽花さん (14 期生 / 宮崎県立日向高等学校出身)



私たちは、吉田道代教授を指導教員とする観光専門演習 I (3 年生ゼミ) の活動の一環として、2022 年 7 月 9・10 日に一泊二日で熊野三山 (熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社と那智山青岸渡寺) を訪れました。

和歌山県内での旅行を企画したのは、いくつか理由があります。まず、私たちが入学した年には、感染症が拡大していたため、新入生を対象とした和歌山県内を巡る宿泊研修が実施されませんでした。また、私たちの中で和歌山県出身がおらず、折角和歌山大学に所属していながら、県内での観光経験が乏しいということを実感していました。そこで、和歌山県内でもこれまであまり行く機会がなかった南紀を訪れることにし、熊野三山を行き先に決めました。ここを選んだのは、世界遺産や宗教・巡礼、インバウンド旅行者の誘致、自然環境の保全など、これまで大学の 2 年間の様々な講義で学んできたことに関連する要素が多くあったからです。また、世界遺産や宗教・巡礼は吉田ゼミの主な研究テーマである文化観光と関わりが深いということも考慮しました。

旅行を企画する際には、文化体験を重視し、熊野信仰の歴史や世界遺産登録の影響を現地で確認する、郷土料理を体験することを課題としました。そして、多くの個人のインバウンド旅行者がするように、移動は公共交通機関のみを利用することにしました。こうした課題の達成に向けて、私たちはまず事前に自分たちで全ての旅程を組み、ゼミメンバーを 3 グループに分けて熊野三山の各宮の担当を決め、その歴史について文献を用いて調査しました。そして、現地ではそれぞれの宮で、調査を担当したグループの学生がガイド役を務めました。これにより、人から説明してもらうのに比べ、三山の歴史や巡礼という行為の宗教・文化的特徴、そしてこれらがどのように観光に活かされているかをより深く理解できたように思います。郷土料理については、新宮市では目張り寿司やなれずし、紀伊勝浦市ではまぐろ料理を味わいました。さらに、紀伊勝浦市では漁港を訪れ、周辺を散策したこともあり、こうした食文化を地形などの自然環境と結びつけて理解するようにもなりました。また、公共交通機関のみを利用したことにより、全体的には比較的効率よく移動はできたものの、立地条件の不利さなど和歌山県南部の観光の弱点も身をもって知ることとなりました。熊野三山を巡った後は、それまでの体験を通した気づきや学びを共有することで旅を締めくくりました。

今、この旅行を振り返ると、自分たちで旅行を計画し実行していく中で、それぞれが責任を持ち主体的に行動する力を高められたように思います。また、座学で得た知識を学外で体験することで、上で述べたような自分たちなりの発見もありました。皆さんも、ぜひ和歌山県で観光を学んでいるという状況を活かせるような場所に目を向け、旅行してみてください。

■ アメリカ GIP 参加をきっかけとした出会いと交流

杉村 奈央さん (13 期生 / 聖心学園中等教育学校 (奈良県) 出身)

みなさん『CHANGE を CHANCE に』、ちょっとした勇気で G を C に変えたことはありますか。私は、キャンパスライフがコロナ禍で窮屈になってしまうという『CHANGE』を、2 年前に参加した GIP を通し現在も交流を続けている、アメリカ人の友人に出会う『CHANCE』に繋がりました。しかも、ただの友人ではなく、おそらく一生の友人になるような。

大学 2 年生の私は、コロナ禍でも世界を知りたい、英会話力を伸ばしたいと、約 1 週間のアメリカ GIP (オンライン) に参加しました。その中で、ミシガン州の大学に通う現地学生とのオンライングループワークを実施するという課題をきっかけに私たちは出会いました。ワークの最後に、ここで会えたのも何かの縁だからプライベートでも定期的に話そうと、GIP 終了後、10 人程のメンバーで Zoom での交流を始めました。しかし、次第に人数は減り、結果、アメリカ人の双子姉妹、GIP に参加した観光学部生 1 人と私、4 人で毎週の交流を続けるようになりました。

はじめは、異文化交流をテーマに話していました。時差のため夜中でも頭をフル回転させ、英語で日本の文化を説明する難しさに直面し、文

化や考え方の違いから意思疎通に戸惑うこともありましたが、それでも、何よりも楽しかった。毎週話すので、コロナ禍で大学に行けない中、大学の友人より話す時間は多くなり、次第に話すテーマは日本人の友人に話すのと変わらない、日々の出来事、誕生日のお祝い、夢、恋バナと変化していきました。

この交流は、コロナ禍で窮屈に感じる日々の中、パソコンを開けば異空間に行けるようなとてもワクワクする、私のかけがえのないオアシスとなりました。このZoomでの毎週2時間の交流は、気づけば2年間続いています。今では、異文化交流の相手というより、すっかり、本当の友人です。オンラインで出会い、1度も直接会ったことのない異国の友人。不思議な感じはしますが、「4人で必ず直接会い、ニューヨークへ旅行しよう」という夢を語り合う仲です。しかし、これは夢物語ではなく、一部はすでに叶っています。今年の7月に、双子姉妹の1人が語学留学のために来日し、私たちは直接会えたのです。この次は、きっとすぐに4人全員が直接会える日が来ると信じています。

この交流のおかげで、私は物怖じせず英語で話せるようになり、アメリカの文化を知るだけでなく、日本を客観的に見る観点、個性を大切にすること、してもよいという考えを養うことができました。何より、逆境(CHANGE)をチャンス(CHANCE)に変えるたくましさ身に付けました。

さいごに、コロナ禍でも臨機応変に対応し、学生の可能性を広げる機会をつくってくださった観光学部、ミシガン州立大学連合日本センターの先生方、そして私の大切な友人に、この場を借りて心から感謝を伝えたいと思います。I can never thank you enough.



■ 地域連携プログラム (Local Partnership Program, LPP) :

岸和田港湾 LPP「港湾エリアにおける持続可能なまちづくり (岸和田港まつりの企画・運営)」のこれまでの活動と今後の見通し

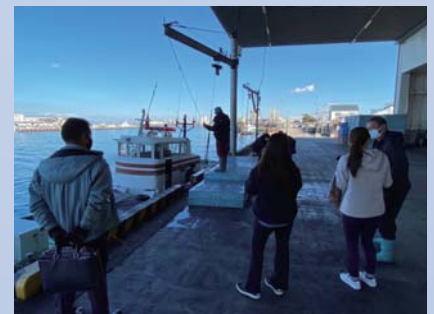
西條 愛理さん (15期生/明浄学院高等学校 (大阪府) 出身)

私たち岸和田港湾 LPP は、大阪府岸和田市と大阪府鰯巾着網漁協共同組合と共に活動しています。岸和田市の沿岸部は、国土交通省港湾局長が申請に基づき登録する「みなとオアシス」として認定されており、このみなとオアシスエリアがメインフィールドとなっています。主な活動として、グルメ開発を行い、現在は10月に岸和田市で開催される親子まつりでの出店に向けて準備をしています。

昨年度は岸和田市で開催される港まつりの運営に関わることで、地域活性化を行うことを目標としていました。しかし、学生がどのような形で運営に関わっていくかを考えていた段階でコロナウイルスの影響で港まつりが中止となり、予め学生で作っていたガントチャート通りには早急いかなかったものの、切り替えてグルメ開発にシフトすることとなりました。岸和田市で水揚げされる海産物を使ったグルメを開発するために、漁協さんのご厚意で水揚げや競りを見学させていただきました。その中で、岸和田市で水揚げされる魚の解説や、値段のつけ方、課題点をお伺いしました。その後も漁協さんや学生との会議を重ねた結果、しらすを使ったグルメを開発することとなりました。試作を行う上で、調理場と魚の提供を漁協が運営している飲食店に担っていただき、漁協の方々に魚のうまみの活かし方等、アドバイスをいただきつつ試作を行いました。そして昨年度の締めとして岸和田市のインターネットテレビに岸和田市長と共に学生3名が出演し、私たちの活動を広める機会をいただき、貴重な経験となりました。

そして今年度は昨年度の活動から引き続き、グルメ開発を行っています。しらすは元々淡泊な味であるため、料理に使うことでしらす自体の味が引き消されてしまうことが課題としてありました。尚且つお祭りで出店するため食べやすさを考慮しなくてはいけなかったため、全7回の試作を重ねながら徐々に改良していきました。その結果、餡にしらすとねぎのみを使い、生シラスを上からかけた揚げ餃子に決定しました。そして現在は、親子まつりでの出店に向けて、最終準備段階となっています。

港湾 LPP の活動を通して学んだこととして、もちろん岸和田市の海産物やグルメ開発のプロセスが挙げられます。しかしそれら以上に我々に身についたことは、行政や漁協といった組織との関わり方や交渉の仕方です。社会人になったときに必要となるスキルを、LPPを通して得ることができています。また、共通認識の持ち方や意見の共有方法など、チームとしての動き方も学ぶことができています。LPPとしての活動は残り少なくなっていますが、最後までチームとして、協力を得ながら岸和田市のために活動していきたいと思っています。



➡ 観光学部 HP : 地域連携プログラム (Local Partnership Program, LPP)

https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/local_study/lpp.html

■ 地域連携プログラム (Local Partnership Program, LPP) :

美浜町 LPP「アメリカ村の観光コンテンツの発掘及び情報発信」 「和大学生による夏まつり」を開催して

岡 昌吾さん (15期生/兵庫県立鳴尾高等学校出身)



美浜町アメリカ村 LPP は、美浜町にあるカナダへ多くの移民を輩出したアメリカ村の観光コンテンツの発掘と情報発信を目的としています。昨年度の活動では、Instagramのアカウントを開設し、美浜町の美しい海や、紀伊日ノ御崎灯台などの見所を投稿することで、情報発信を行ってきました。その一方で、私たち LPP のメンバーは、Instagramだけではなく、実際に現地を訪れることでアメリカ村や移民について知ってほしいと考え、同地の移民について紹介しているカナダミュージアムを中心として、イベントが出来ないかと考えました。しかしコロナ禍のため LPP の活動が制限され、人が多く集まるイベントを実施することが難しかったことから、昨年度は構想の段階にとどまっていました。

しかし、2022年度は、活動の制限が緩和されたことで、ようやくイベントの開催が可能となり、実施に向けて準備を進めました。その際、誰に向けたイベントにするのかという点を私たちは重視しました。メンバーで話し合った結果、美浜町やその周辺地域に住む小学生を対象にすることにしました。これは、Instagramを使用している方々だけではなく、美浜町やその周辺地域に住んでいる子どもたちにも、地元やその周辺の地域についてより知ってもらいたいと考えたからです。また、夏休みの思い出の一つにしてほしいという想いから、「和大学生による夏まつり」と題して、8月21日(日)に開催することを決定しました。

当日は、屋外と屋内の遊びを組み合わせ、ウォークラリー、玉入れ、ヨーヨー、ビンゴ、クイズを行いました。ウォークラリーでは、アメリカ村周辺にある寺や神社、レストラン、カナダミュージアムをチェックポイントとし、チェックポイントではその場所に関するクイズを出題することで、私たち大学生と一緒に歩き、子どもたちが楽しみながらアメリカ村周辺について知ることができるように工夫しました。また、ミュージアムの庭では、美浜町にある煙樹ヶ浜でとれた松ぼっくりを使用した玉入れ、ヨーヨー釣りや的あてを行い、夏まつりの雰囲気を味わってもらいました。他にも、ミュージアム内で開催したクイズ大会では、美浜町に関する問題も出題することで、ウォークラリーと同様に地元について知ってもらえるように工夫しました。その結果、併せて行ったビンゴ大会も含めて、ミュージアム内でのイベントも楽しんでもらえたようでした。

当日は早朝に雨が降り、開催がややぶれましたが、無事にイベントを開催することができ、多くの方が「夏まつり」に来てくださいました。メンバー全員がイベント運営を手掛けること

が初めてで、戸惑った部分もありました。しかし、来場してくださった多くの方に満足していただきました。ウォークラリーやクイズ大会では子どもたちだけではなく、保護者の方からも「美浜町について知ることができ、楽しかった」という感想をいただきました。また、コロナ禍で夏休み中になかなか遠くに出かけることが出来ないなか、夏まつりに参加したことで「夏休みにいい思い出をつくることができた」というお声を頂いたときは、本当に開催してよかったと思いました。より多くの方々へ美浜町について知ってもらうために、今後も美浜町を盛り上げる活動を続けていきたいと思っております。

最後に、夏まつりの開催にあたり、さまざまな点でサポートしてくださった美浜町役場ならびにカナダミュージアムの皆様にお礼申し上げます。

➔ 観光学部 HP : 地域連携プログラム (Local Partnership Program, LPP)
https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/local_study/lpp.html

■ 地域連携プログラム (Local Partnership Program, LPP) :

雑賀崎 LPP「雑賀崎の観光スポット (レモンの丘) 整備と活用のための情報発信 (L活)」について 林 さくらさん (15期生/長崎県立長崎北陽台高等学校出身)

私は今年度から雑賀崎 LPP に参加している。現メンバーは私を含めて6人。また現時点での雑賀崎訪問回数は2回である。コロナの影響もあり、なかなか頻繁には訪問できないが、大学の感染対策に沿って活動させていただいている。

第1回目の訪問。目的は雑賀崎を知ること。私は雑賀崎を訪れることは初めてではなかった。雑賀崎の灯台やスハネフという喫茶店にはすでに何度も足を運んでいる。しかし、そこに住む人々の暮らしぶりや、立ち並ぶ家々の間にある小道を歩いたことはなかった。「雑賀崎」バス

停から急な階段を下り、メンバーの一人に案内してもらいながら進んだ。その日はとても暑く階段や坂の上り下りがとても大変であった。こんなところを、雑賀崎に住む人々は毎日歩いて生活しているのか、と考えてしまった。しかし、住みたいとも思ったのだ。なぜだろう。その日は雑賀崎をまわり、LPPでお世話になっている方々に挨拶をし、一日を終えた。

第2回目の訪問。この日は雑賀崎に1泊2日の宿泊予定。1日目は以前から気になっていた「はたうり」を見る。2日目はチーム雑賀崎による会議への参加。今回利用させていただいた宿泊先は「新七屋」という民泊だ。雑賀崎の家々の中にひっそりとたたずむ、外観も美しく、穏やかな内装の二階建ての家であった。夕方、新七屋で少しゆっくりした後に、はたうりへ。「はたうり」とは、漁から戻り、すぐにその場で、たった今釣ってきた魚を売るというものだ。実際に目にして、私は衝撃を受けた。私たちからしたら珍しいその光景は、地元の人には当たり前であり、沢山の住民がはたうりを利用していただいていたのだ。想像以上だった。2日目の朝。チーム雑賀崎の皆さんと合流し会議が始まった。「チーム雑賀崎」とは雑賀崎の住民の皆さんを活動主体とし、そこに行政（和歌山市移住定住推進課）と、アルパックという市から委託された民間団体が加わったチームである。内容は雑賀崎の空き家利用について、雑賀小学校との取り組みについてだ。まだまだ始まったばかりだが、これから学生もその活動に加わせていただく予定だ。

たった2回の訪問ではあるが、得たこと、考えたことは山ほど。一番考えたことはなぜ雑賀崎に住んでみたいと思ったのか。それは、そこに住む人々が皆、充実した生活を送っているように感じたからだ。加えて、1回目の訪問時に挨拶した方々やチーム雑賀崎の皆さんとお話した際に、本当に雑賀崎が好きなのだ、自分の住んでいる場所に誇りを持っているのだと感じたからだ。今後の活動はチーム雑賀崎のイベント参加を予定している。またレモンの丘竣工式も2月の予定だ。見つけた課題、やるべきことは沢山あるが、私たちができることを模索し、尽力していきたい。

➡ 観光学部 HP：地域連携プログラム（Local Partnership Program, LPP）

https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/local_study/lpp.html



Topics ー過去のイベントとニュースー

■ Sカレ（Student Innovation College）2021：総合優勝戦 総合準優勝！

Sカレ（Student Innovation College）2021は、25大学28ゼミ396名の3年生が、ゼミ対抗で、8テーマの商品企画をFacebookで公開し「いいね！」で支持を集め、コメントで改善し、発売を目指していく、学生のインターカレッジです。

2022年10月2日（日）にオンラインで開催されたSカレ2022秋カンの中で、「2021年度Sカレ総合優勝戦」が行われました。

「2021年度Sカレ総合優勝戦」とは、Sカレ2021の冬カン（大会）のプラン発表でテーマ1位となり、2022年9月30日までに商品化達成したチーム（ファイナリスト）が、プレゼンを行い、企業・教員の皆さんの投票により、Sカレ2021総合優勝、総合準優勝、総合3位、優秀賞（4位以下全チーム）を競いあうもので、発売された商品の①市場成果（売上や利用人数）、②商品・サービスの独自性（競合との新規性や差別性）、③マーケティング活動（商品化や実績への努力等）、④プレゼンの完成度という4つの基準によって評価されます。

昨年コンセプト1位、テーマ1位を受賞し、商品化された「SDGsに貢献する旅行商品」（観光学部佐野ゼミ4年生の塩路彩乃さん、齊藤彩花さん、谷口紗彩さん、尾上雄介さん）は、2022年Sカレ総合優勝戦で「総合準優勝」を受賞しました。



➡ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022100300048/>

➡ 本誌バックナンバー「WTU 2022SS」にも記事を掲載しています（2ページ）

http://www.wakayama-u.ac.jp/_files/00249980/WTU_2022SS.pdf

■ 学部内公開講義を実施しました



2022年度前期には、多彩な講師をゲストスピーカーにお招きし、学部内公開講義を実施しました。参加者は、観光をめぐる最新のトピックスに熱心に耳を傾けていました。

- ▶2022年5月25日(水)実施：
「Today's World, Refugees and Why Should You Care: A UN Perspective」
講師：国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 前駐日代表 ダーク・ヘベカー氏
- ▶2022年7月20日(水)実施：
「リゾートデザインカンパニー『スターリゾート株式会社』の考える持続可能な観光」
講師：スターリゾート株式会社 取締役 COO 宇田川 悟氏
- ▶2022年7月27日(水)実施：
「地域経済分析システム (RESAS) でビッグデータを「見える化」
～普段住んでいるまち、気になるまち、地域をデータで分析してみよう～」
講師：経済産業省 地域経済産業グループ 地域経済産業調査室 RESAS 開発担当 鳥野耕司氏

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事

- <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022052700033/>
- <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022072000045/>
- <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022080100010/>

■ 「ツーリズム EXPO ジャパン 2022」@東京ビッグサイトに出展しました

2022年9月22日(木)～25日(日)、「世界の観光・ツーリズムをリードする」総合観光イベント「ツーリズム EXPO ジャパン 2022」が東京(会場：東京ビッグサイト)で開催されました。

本イベントに和歌山大学観光学部が出展し、学部の研究・教育活動や、2023年4月に新設される和歌山大学大学院観光学研究科 観光地域マネジメント専攻(専門職大学院)に関する紹介などを行いました。

➔ 観光学部 HP <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022090600012/>

Future Events —今後のイベント紹介—

■ 「2022年度 和歌山大学『観光・地域づくり』講座 @Zoom」のご案内



本講座は、観光地や観光ビジネスにおいて高く評価されているキーパーソンを講師に招へいます。各方面で活躍されている方々のユニークな着眼点やリーダーシップを発揮しての事業の推進、異業種を巻き込んだのコンセンサスの形成方法など、さまざまな観点からの実践事例を拝聴するなかで、和歌山県をはじめとする地域の観光振興とまちづくりの方向性を探ります。

なお、本講座は2008年度から2019年度まで開講してまいりました「観光カリスマ講座」を受け継ぎ、2020年度より「和歌山大学『観光・地域づくり』講座」として開講しています。また、本講座は観光庁「中核人材育成講座」公認プログラムです。

2022年度は、昨年度同様、Zoomのウェビナー機能を利用したオンライン公開講座(ライブ配信)となっています。既に第1回・第2回は終了していますが、第3回(11/17)・第4回(12/15)・第5回(12/22)の受講申込を受け付けています。皆さまの聴講をお待ちしております。

➔ プログラムや参加申込方法などは、観光学部 HP 掲載ニュース記事をご覧ください。
<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2022091300010/>

編集・発行

(2022年10月発行)

和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス

〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学西4号館 K216室、K116室

TEL 073-457-8553 / E-mail tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp / URL <http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/>

*本誌は Web ページからも閲覧できます→<http://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/WTU.html>

